

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第81回

Code for America Summitに行ってきた!

● Code for Japan 関治之(せきはるゆき) [Twitter @hal_sk](#)

Code for Japanの関です。「ともに考え、ともにつくる」のコンセプトのもと、地域コミュニティがテクノロジー活用を通じて、自分たちの町を自分たちの力でアップグレードできるような社会をめざして活動しています。

Code for Japanのこのような活動は「シビックテック (Civic Tech)」と呼ばれており、世界中で活発化しつつあります。中でも、米国で活動しているCode for Americaはシビックテック企業の代表格と言っても良いと思います。Code for AmericaとCode for Japanは独立した団体ですが、ともにCode for Allという国際ネットワークの参加メンバーでもあります。

世界最大規模のシビックテックカンファレンス

Code for Americaでは、毎年Code for America Summitという年次イベントを行っており、国内外のシビックテックに関する団体が集まり、事例を共有するとともにワークショップなども実施しています。筆者も2016年から毎年参加していますが、今年もたいへん刺激になりましたので、誌面を借りてみなさんに雰囲気をお伝えしたいと思います。

今年のサミットは、アメリカを中心に、3日間で世界中から1,200名を超える参加者が集まったとのこと。参加者の正確な内訳はわかりませんが、各地で活動するCode forのメンバーはもちろん、連邦政府、州政府、郡政府の役人やCIO、議員、エンジニア、デザイナーなどのほか、マイクロソフト

やアクセンチュアといった企業の人たちも参加しており、たいへん多様なメンバーになっていました。35を超えるセッションでは、たとえば次のようなトピックについてカバーしています。

- 人間中心設計を行政プロセスやプロジェクトに適用する
- 市民により早く多くの価値を提供するために、どのようにプロジェクトスコープの定義やソフトウェア調達プロセスを改善するか
- ユーザ中心設計やアジャイルをどのように行政で実施するか
- 市民コミュニティがどのようにデータを活用して行政課題を理解するか
- 意味のあるデータダッシュボードをどのように構築するか
- ノンテックなマネージャーが知るべきこと
- 行政のデジタル化の中でマネジメント層に求められる役割
- たいへんな中でもコミュニティの勢いやモチベーションを維持する方法
- クロスファンクショナルなチームをどのように構築するか

また、ただ知識を詰め込むだけではなく、成功のみならずうまく行かなかったことも率直に公開し、改善について話し合うようなディスカッション形式のセッションも多いのが特徴です。

Delivery-Driven Government

Code for Americaのファウンダー、Jennifer Pahlka氏のセッションです。セッション全般にわたって何度も繰り返されたテーマが、この、Delivery-Driven Governmentでした(写真1)。セッションの前日に彼女はブログでも公開^{注1}しているのですが、Delivery、つまり行政が市民に向けたサービスを「届ける」ことを起点に政府を作っていくという考え方です。

政治家が政策を決め、それに従い官僚が制度を作り、運用し、人々に届くという順番ではなく、ユーザーニーズから始め、人々にサービスを届ける部分を設計し、そこからのフィードバックをもとに制度や政策を決めていく、という逆のフローを強く推し進めるのが重要で、テクノロジーやデータを活用することでそのような人間中心設計的な考え方が行政プロセスにも適用できるというわけです(図1)。

シビックテックの活用例として紹介されるアプリケーションやプロトタイピング、ワークショップといったプラクティスを実践するだけではなく、ユーザーを中心にした政策立案や制度運用を推進し、フィードバックループを完成させる必要があり、それができてこそ、政府の政策が意図する目標を効果的に達成することができるのです。システム開発の分野でいう、DevOpsにも通じる考え方ですね。彼

▼写真1 Code for Americaのファウンダー、Jennifer Pahlkaのプレゼンテーション



女は、Delivery-Driven Governmentの原則として、次の3つを挙げています。

1. ユーザーニーズを理解し、ユーザーに合わせる
2. 何年も経った統計などのデータから推測するのではなく、リアルタイムなユーザーデータをもとに考える
3. 意図してから、実装されるまで、反復的に開発を行う

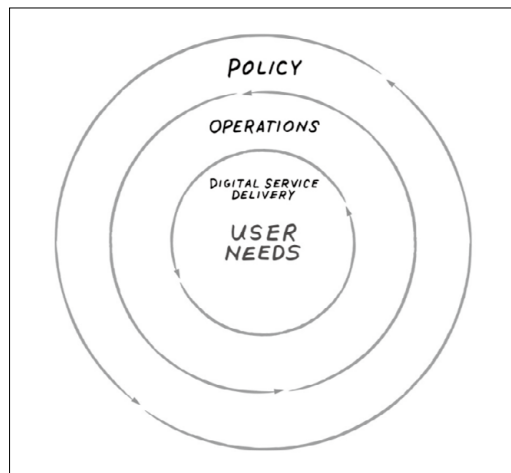
シビックテックというと、なにかアプリやシステムを作るほうに注目が行きがちですが、Code for America Summitのセッションの多くは人間中心設計やデザイン、プロダクトマネジメント、人々のリテラシー向上といった内容が多かったのも印象的です。

デジタルガバメントで先頭を行く、GDS

また、記憶に残ったセッションが、イギリスの内閣府内の組織で、政府のデジタル化を推進するGDS(Government Digital Service)のLouise Downeさんの発表でした(写真2)。

GDSは6年前に設立され、デジタル政府への転換を強く打ち出しつつ、民間の優秀な人材を次々と採用し、政府のデジタル化を推進してきました。GDSは政府のWebサイトGOV.UKを運営し、パス

▼図1 ユーザー中心設計と政策(Code for Americaブログより)



注1 <https://medium.com/code-for-america/delivery-driven-government-67e698c57c7b>

ポート更新や投票のための新しいデジタルサービスなどのシステムを構築、膨大な金額を投資してきました。

プレゼンの中では、単にフロントエンドをデジタル化することがゴールではなく、政府のサービス提供プロセスにかかわるすべてをデジタルファーストに変えなければならず、そのためには、サービスデリバリー部分だけでなく、政府のさまざまな組織と一緒に働くことが重要であると言及されていました。

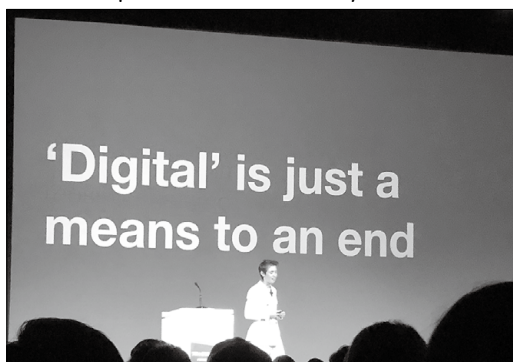
そのために、公共サービスを提供するための新しいモデルとして、政府のさまざまな機関の人々を集め、より良い政府を築くために必要となるツール、リソース、サポートや基準を彼らに与えています。

サービスデザインの考え方をとても重視しており、デザイナを育てるためのワークショップを各地で行い、すでに950名が参加したとのこと。民間のちからをうまく取り入れながら行政のデジタル化を推進しており、キャパシティ・ビルディングがとても上手なのを感じました。

成果を祝い、エネルギーを 充填する場

サミットには、世界中から実践者が参加します。たとえば、Code for ChicagoやCode for San Franciscoといった、Brigade (ブリゲイド) と言われる地域版Code forがいます。日本にもCode for KanazawaやCode for Kobeといったコミュニティがあるのと同じですね。

▼写真2 Louise Downeさんの発表 (https://www.youtube.com/watch?list=PL65XgbS1alU3CP0pBOzBiX-31rzK8oox&v=yLYRmrT2d_U)



また、前述したようにCode for PakistanやCode for Romaniaといった海外メンバーも参加していました。各地でのCode forの活動を行うことは楽しいことばかりではありません。このようなサミットの中で各自の活動を共有し、成果を祝うことで、「よし、これからも頑張ろう」という気持ちになります。アフターパーティやネットワーキングも、とても楽しかったです(写真3、4)。

一方、国防総省の登場には 物議も

ここ数年、Code for Americaはさまざまなアプリケーションやサービスの開発に関わり、行政のデジタルトランスフォーメーションにも大きく貢献をしています。とくに、過去の軽犯罪レコードを削除するための手続きをデジタル化したClear My Recordや、フードスタンプ(日本で言う生活保護制度のようなもの)の申請漏れやミスを大幅に減らしたGetCalFreshといったサービスは有名で、サミット内でもセッションがありました。この領域は、GovTech(ガブテック)とも言われています。

しかしながら、初日のメインステージでのセッションに国防総省が登場し、国防総省内部のデジタル化をCode for Americaが手伝った話をしたときには、Twitterなどで疑問の声が上がりました。シリコンバレー発の革新的な技術やプロセスを軍事調達プロセスに導入するという成功事例ながら、そもそも戦争を手伝うような技術開発を行うのは「市民

▼写真3 会場に置かれていた、おもにBrigadeによる大量のステッカー



Code for America Summitに
行ってきた!

の力で地域や行政上の課題を解決する」というシビックハッカーが行うべき内容ではないのではないのか?という疑問です。筆者もこのプレゼンテーションには正直違和感を感じました。台湾のシビックテックコミュニティ、g0v(ガブゼロ)メンバーがこの件について記事を書いています^{注2}。

「シビックテック」という言葉の定義はあいまいで、活動内容も多岐にわたります。とくにCode for Americaは行政との結び付きが強く、行政内部のデジタルトランスフォーメーションを強く手伝ってきました。このような領域まで踏み込んでサービスを展開しているということは、米国ではそれだけシ

ビックテックが実社会に浸透してきているということの証左でもあります。しかしながら、今回のような価値観の違いも今後でてくるのだと思いました。



ほかに興味深い話がたくさんありました。メインセッションの動画については、YouTubeでも見られる^{注3}ので、興味が湧いた方は見てみてください。

Code for Japan Summitを
開催します!

日本でも、シビックテックの実践者や政府、自治体の人々が集まり、事例を共有したり、新しいことを学んだりするためのサミットを、Code for Japanは毎年開催しています。毎年数百人が訪れる日本最大のシビックテックに関するイベントなのですが、今年は9月22、23日に新潟市で開催予定です^{注4}。シビックテックのムーブメントには誰でも参加ができます。技術者、デザイナーはもちろん大歓迎ですが、「ともに考え、ともにつくる」思いのある方は、どんな方でも歓迎します。

新潟まで来れない!という方も、Code for Japanでは、2ヵ月に1回、Social Hack Day^{注5}というオープンなイベントを行っています。もしご興味があれば、ぜひ参加してください。**SD**

▼写真4 Code for Allのメンバーと



注2 <https://g0v.news/code-for-america-summit-is-it-still-civic-tech-when-we-help-the-us-department-of-defense-a7df26b496bc>

注3 <https://www.youtube.com/playlist?list=PL65XgbSILalU3CP0pB0zBiX-31rzK8oox>

注4 Code for Japan Summit 2018 Webサイト **URL** <https://summit2018.code4japan.org/>

注5 <https://hackday.code4japan.org>

Column 共同連載の経緯

この連載は「東日本大震災に対し、自分たちの開発スキルを役立てたい」というエンジニアの声をもとに発足されたHack For Japanの活動のご紹介として、2011年11月号より続けております。時間の経過に伴い活動の内容も変化し、Hack For Japan自体は今後発生する災害に対して過去の経験を活かすために、エンジニアがつながり続けるためのコミュニティとして継続しています。連載記事のほうも「エンジニアができる社会貢献」をテーマにさまざまな内容でお届けしてきました。

また、一部のメンバーは、市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援や、自治体への民間人材派遣などの事業に取り組むCode for Japanのほうで積極的に活動しており、本連載でもCode for Japanの活動の紹介をする記事が増えてきていました。そこで、より多様な執筆メンバーからの記事をお届けするために、今号からはHack For JapanとCode for Japanによる共同連載として続けさせていただければと思います。